

(第四圖) 本圖は「半劫」の劫立ではないが、故關五段の實戦に出来た一寸面白い形である。關五段曰く、

「白一より黒二十まで、或劫争の劫立なり、白九の時黒十二へ尖まば白十三黒十四白十八黒十五白二十黒十七白二十一黒十六にて矢張り同じ劫数なり」と。

(第五圖) 黒い白ろ黒は白にと絆つ放して置くのは、後に白へ提り黒へ白はと粘ぐものとしても、白よりいと下られ黒は白に黒提と黒が後手になるに比し、黒一手得である白はと提るのは他の劫立の時か、次いで直ちに白はと粘ぐ前がよろしい。

白はと無意味に提つて置くのは、後に黒はと提られる手順となると一劫損である。

但、黒提と粘がれる爲に黒から二劫以上劫立が生ずる場合は提つて置くがよい。黒との絆つ放しも心得て置かねばならぬ。黒りと抑ふるは黒ぬと粘ぐ手順となつた時三劫の損、白ぬと提る手順となつた時一

石の下

本局は天保十年二月一日、於久貝殿—安井算知先番に對する本因坊秀和五目勝の碁で、前に説明した「提らず三目」の形が右下隅に實地に生じてゐる。

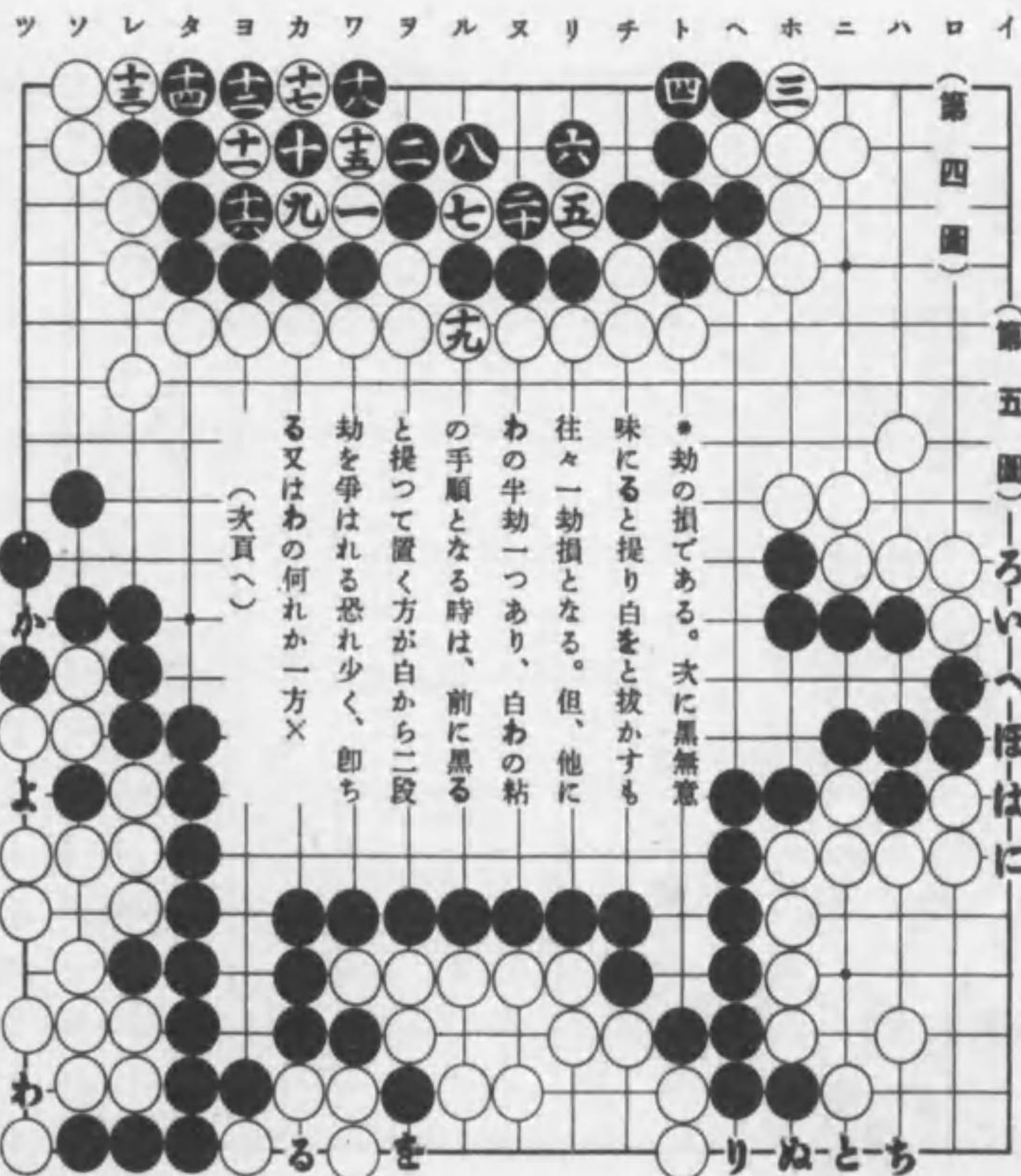
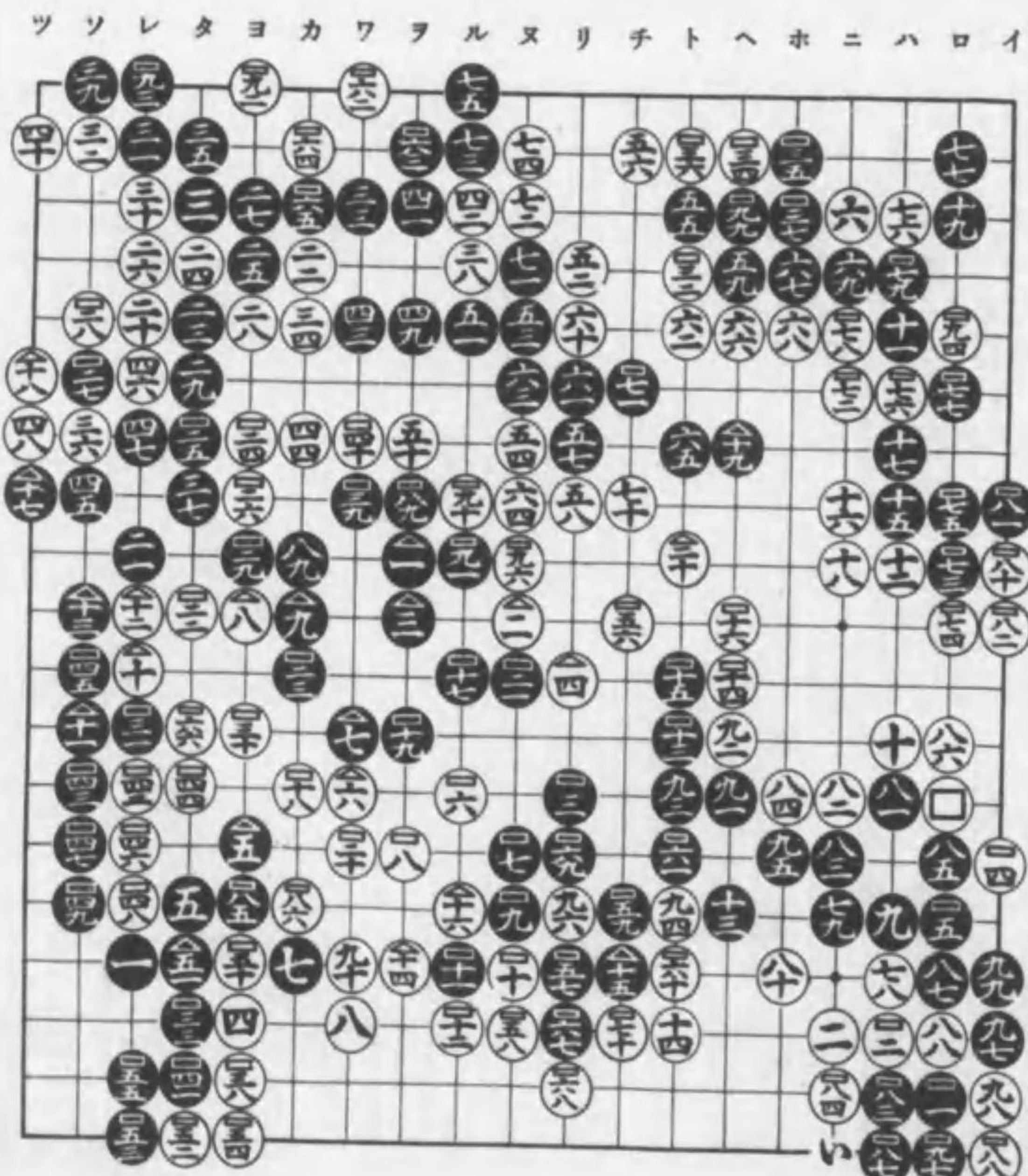
此「提らず三目」なるものは、形より言へば「石の下」で、理論上は「劫盡し」の原則によるべきである。

白いと抑へる手、黒が百八十八と提る手は「提らず三目」に九十八の一子の取捨を加へるから、何れも四目得である。

○九十八の跡、原譜白二百二十手迄

Xを粘ぐ事が出来るから安全である。

白かと提るよりは白よの方が多くの場合一劫得。然し他にわの一劫あり、白劫立多き碁ならば白わの手止りを豫想してかに提り二劫劫を突張る事もある。是等は「持碁一」の碁に於て殊に注意を要す。



(第五圖) 一ろいへはにはに

劫の損である。次に黒無意味にると提り白をと抜かすも往々一劫損となる。但、他にわの半劫一つあり、白わの粘の手順となる時は、前に黒ると提つて置く方が白から二劫劫を争はれる恐れ少く、即ちる又はわの何れか一方X

(次頁へ)

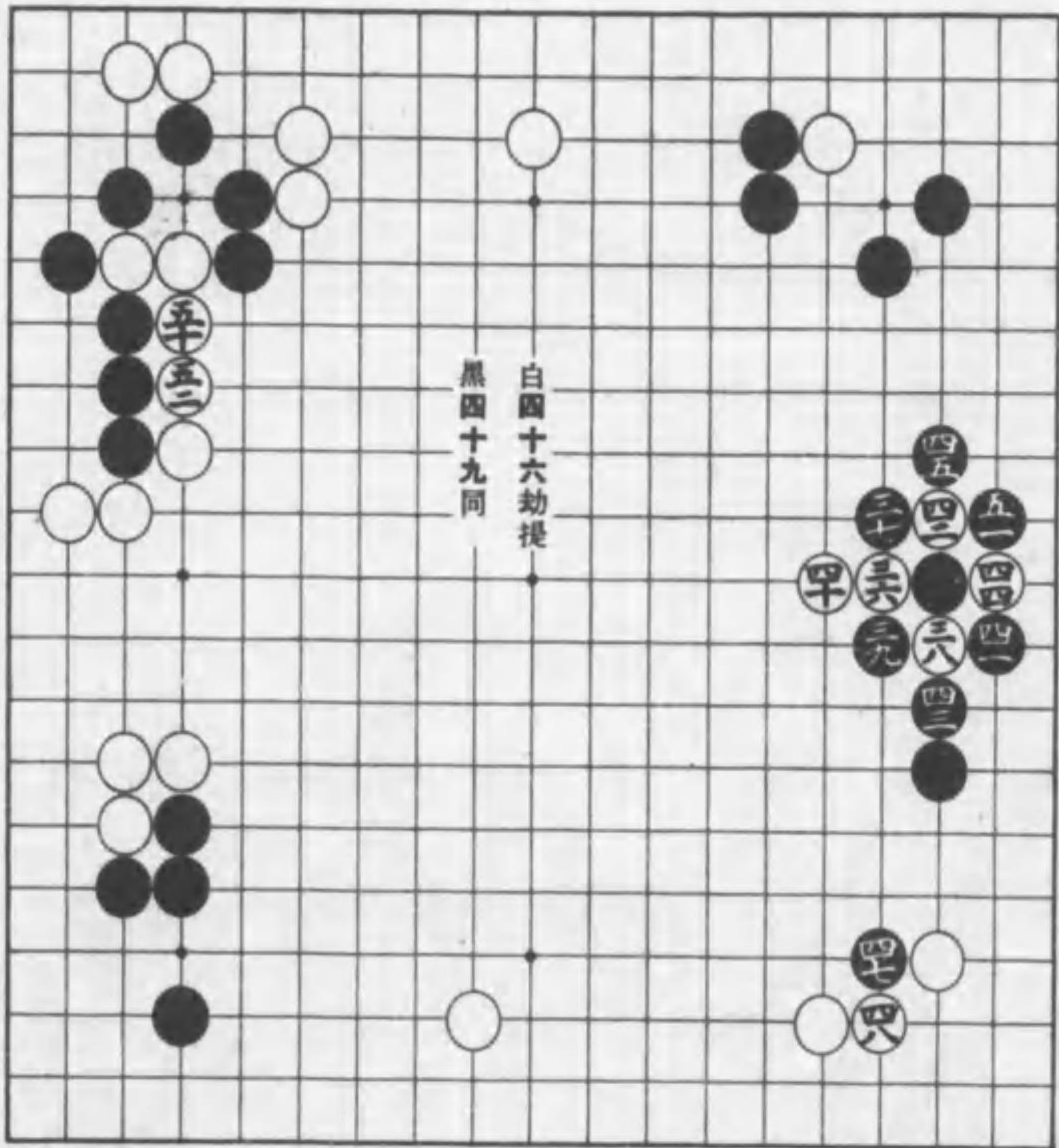
劫の手割

白三十六は挑戦の一着である。かくて黒三十七以下激戦の後、白五十二迄となり、右中側方面は黒が劫を打抜いた結果、非常に手厚くなつた譯であるが、それにも拘らず、全局の形勢を展望するに、黒が危い事になつてゐる。

これは黒の劫を打抜いた手割が、白五十二の劫代りに相當しないからである。即ち白四十二にて假に五十に打つたとすれば、黒は何はともあれ五十二に突出すべきものを四十三に打抜き、白五十二と粘がれて白の二目は復活し、黒の八目は危険に陥つた手割になつてゐる。

尤も白四十二對黒四十五、白四十四對黒五十一の交換は黒得であるが、黒の堅き處が更に堅くなつたといふ位のもので、黒四十七對白四十八の不利な交換を差引けば、黒の得る所はあまりない。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

然らば黒は如何に應ずべきか。

黒三十七に存する疑問は後に解決するとして、既に黒四十五以下の劫争となつた以上は、白五十の劫立に對しては本圖の如く黒五十一と突出し、白劫を提る時黒五十三と抑へ、以下黒五十七迄と打ち、右中側を突破されたる損害を、右下隅の利益と左上の利益とにより償ふのはかはない。

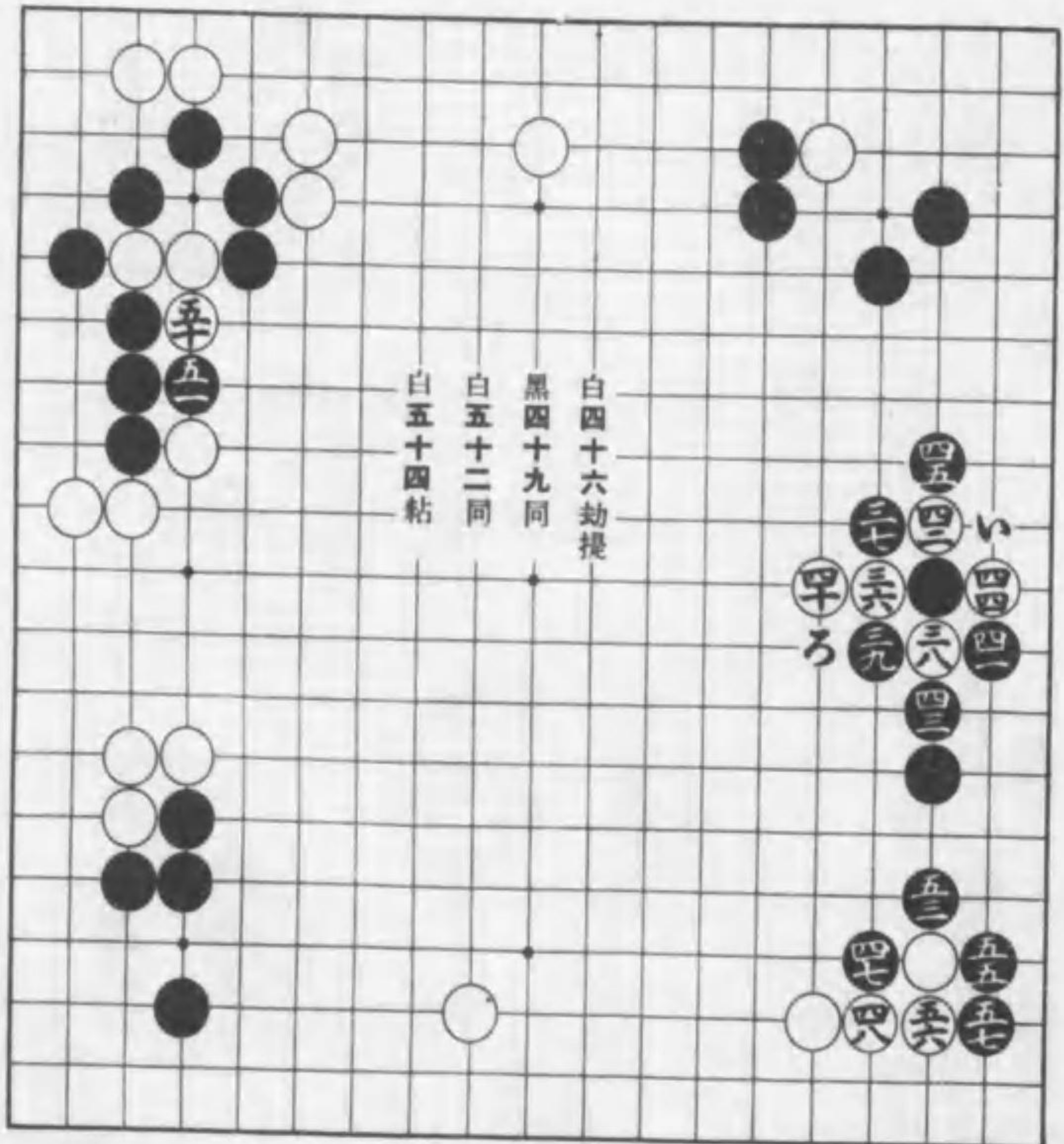
尙、初學の人は黒四十五をいより打つが、これは黒が劫に負けた時に損であるし、又白に場合により四十五と引く餘裕を興へるから悪い。

然し、遡つて白三十六の挑戦に應ずる黒三十七に疑問がある。

黒三十七は我が堅陣に敵を追ふ意味を以て三十九より繰ね、白四十二黒四十四白三十七黒三十八と打たねばならぬ處である。

次に黒四十一のアテに至つては、この際厳しく黒ろと押し行くべく、然らざれば、二間拓の黒が働かぬ事になる。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

劫味で打つ

(第一譜) 本局は作り碁ながら、白の方が形勢の悪い碁である。

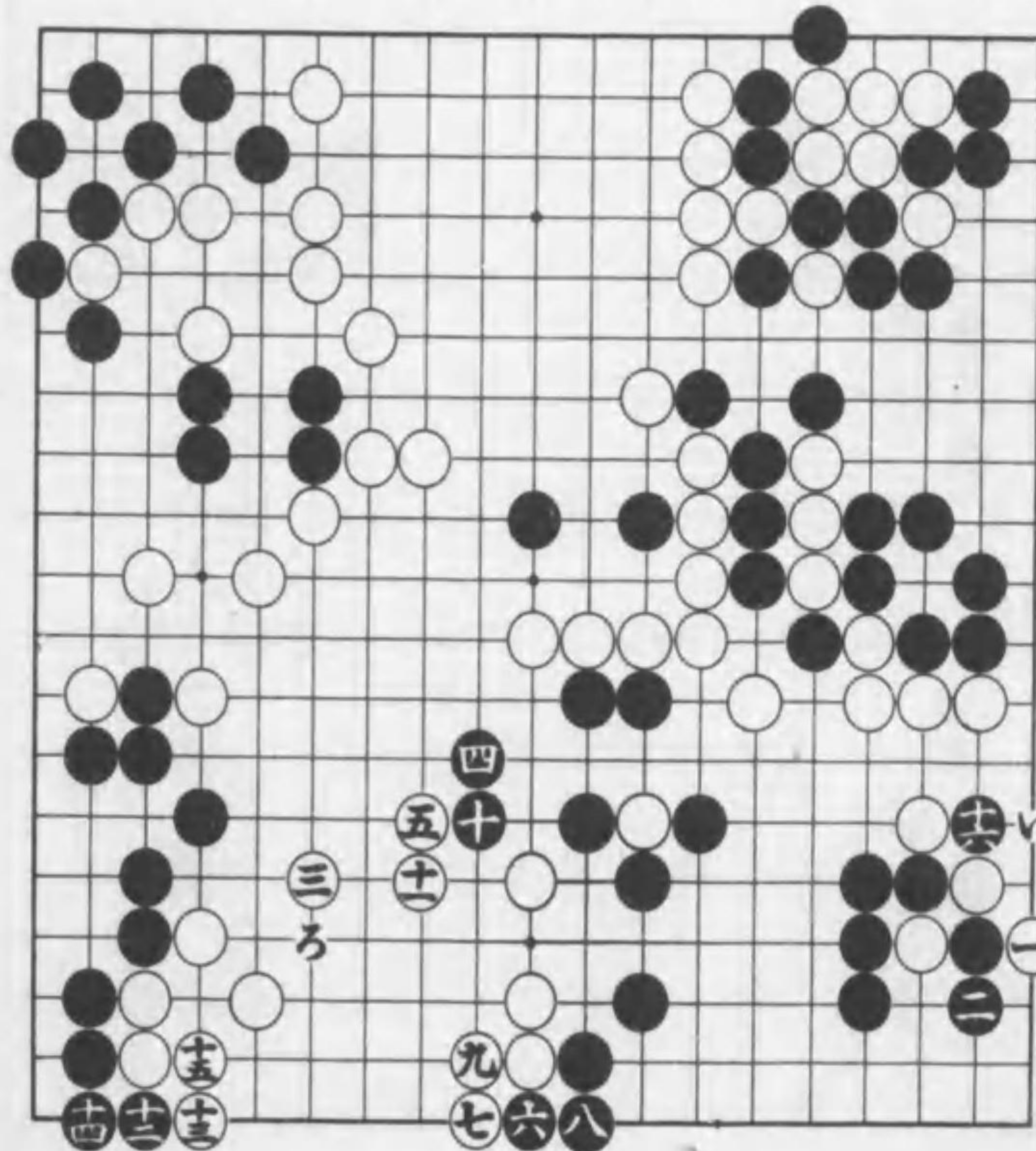
白一にて十六に粘ぎ、二の夾みを獲すのは大きい所であるが、然すれば黒より少くともろの邊まで侵入される。

又單に白三と守ると、黒十六と截られる手順となり、白の敗勢は愈々確立する。

白一と粘ねたのは、次に白三と守る手順を得る爲で、黒十六の截に對してはいの劫味を含む手である。

但し、本局に在つては黒よりの劫立が多いから、一見無効の手段のやうに思はれるが、局面が進んで来れば段々劫立も減つて来るし、黒としては是が氣に懸つて幾分打方を牽制される傾きもあり、さりとして今一手手を入れてある餘裕もないから、兎も角も面白い碁である。
是を劫味で打つと言ふ。更に第二譜へ。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



(第二譜) 白一より黒十六まで再掲。前流いの劫味による影響は、本譜に至り次第に看取される。

一例を擧ぐれば――

白四十三は後手三日(但し黒よりすれば先手三日)の手であるが、いと劫に行く時機を観望しつゝ、白よりするろの劫立を含んだ意味である。

黒五十四は之が防禦。

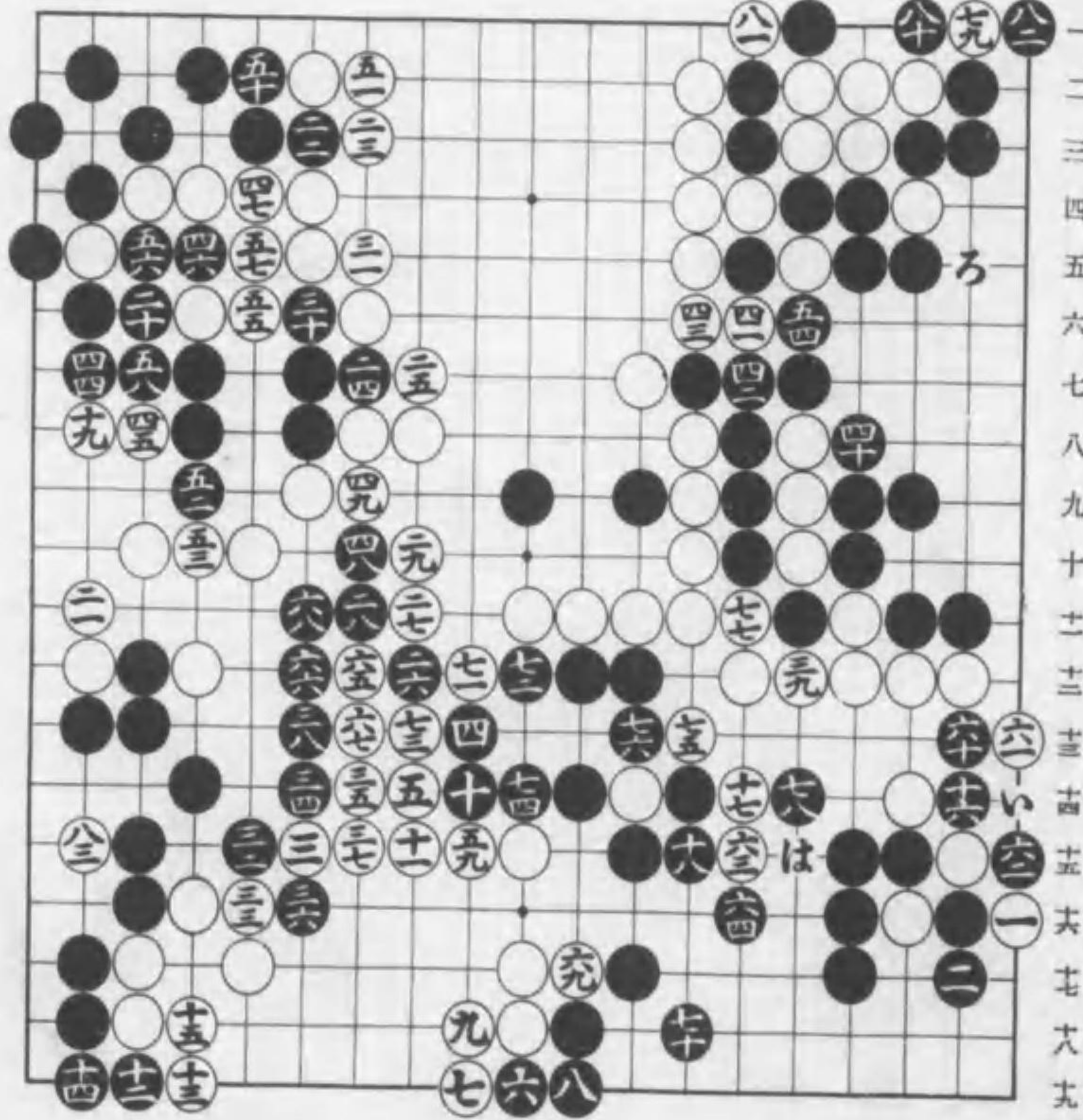
即ち、白四十三は先手一日弱の得となつた譯である。

かくて、結局黒六十二と手入し、以下白八十三の頂となり、持碁にまで清きつける事になつたから恐ろしい。

尙白七十九は此點に黒に下らるゝ手順となるに比し、四劫の得で、最後の半劫に備へたものである。

話は違ふが、白七十九にてはに出て置くがよいか、否か、は侵分の手止りと見合の問題として研究の價値がある。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



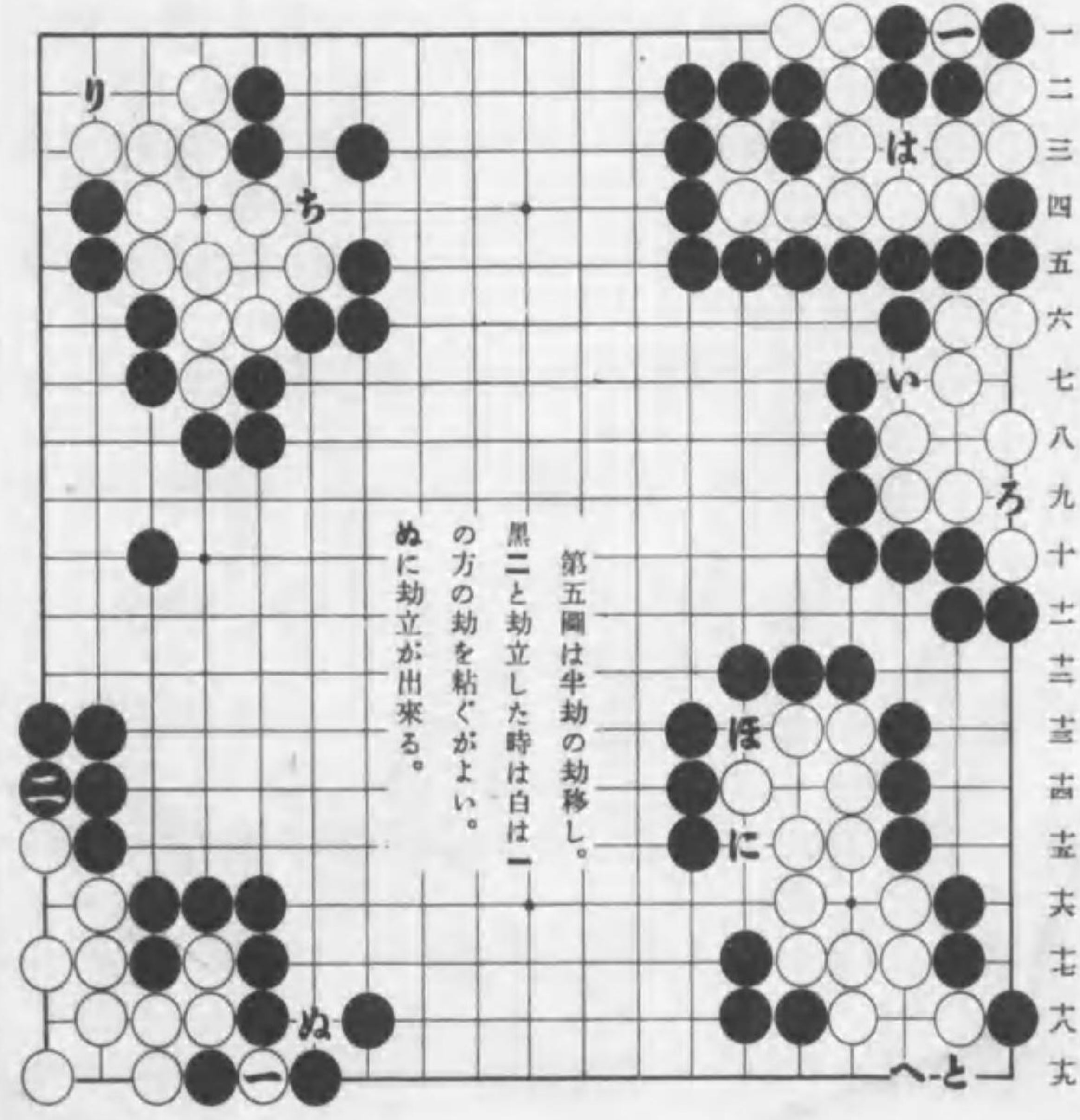
劫 移 し

「劫移し」は「劫代り」の一種である。
 第一圖白一と劫を提る時、黒第二圖いはろに劫立せば、白はと打抜くがよい。
 この劫移しは假令第二圖の方が提られても小さいから得である。

又、黒第三圖にと立て、も白は多くは提替るであらう、それは第三圖黒は白へ黒となる劫移しが二段劫だからである。

第四圖、黒ちと劫立した時も亦劫移しにしたい。第四圖には白り以下の活劫が澤山立つからである。但し黒からの劫立が多い時は、結局大きな方を提られる事になるから、双方の劫立を計算してからの事たるや勿論である。その他劫に勝つた爲に味がよくなる時や、劫移しの方の劫に負けても味が残る時や、何れか一方が劫の提番になる。即ち一劫得の時は計算上の多少の損得は度外視して劫移しにすることが多い。

ツソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



劫 代 り

「劫代り」は劫の代償の意味である。
 劫の手割、劫移し等何れも劫代りの問題に属する。

劫代りの際は、その劫及び代償物の大きさは元より、双方の劫立の数、全局の勝敗の数等も顧慮せねばならぬからむづかしい。先づ別々の二へ二手打つ劫代りから説明する。

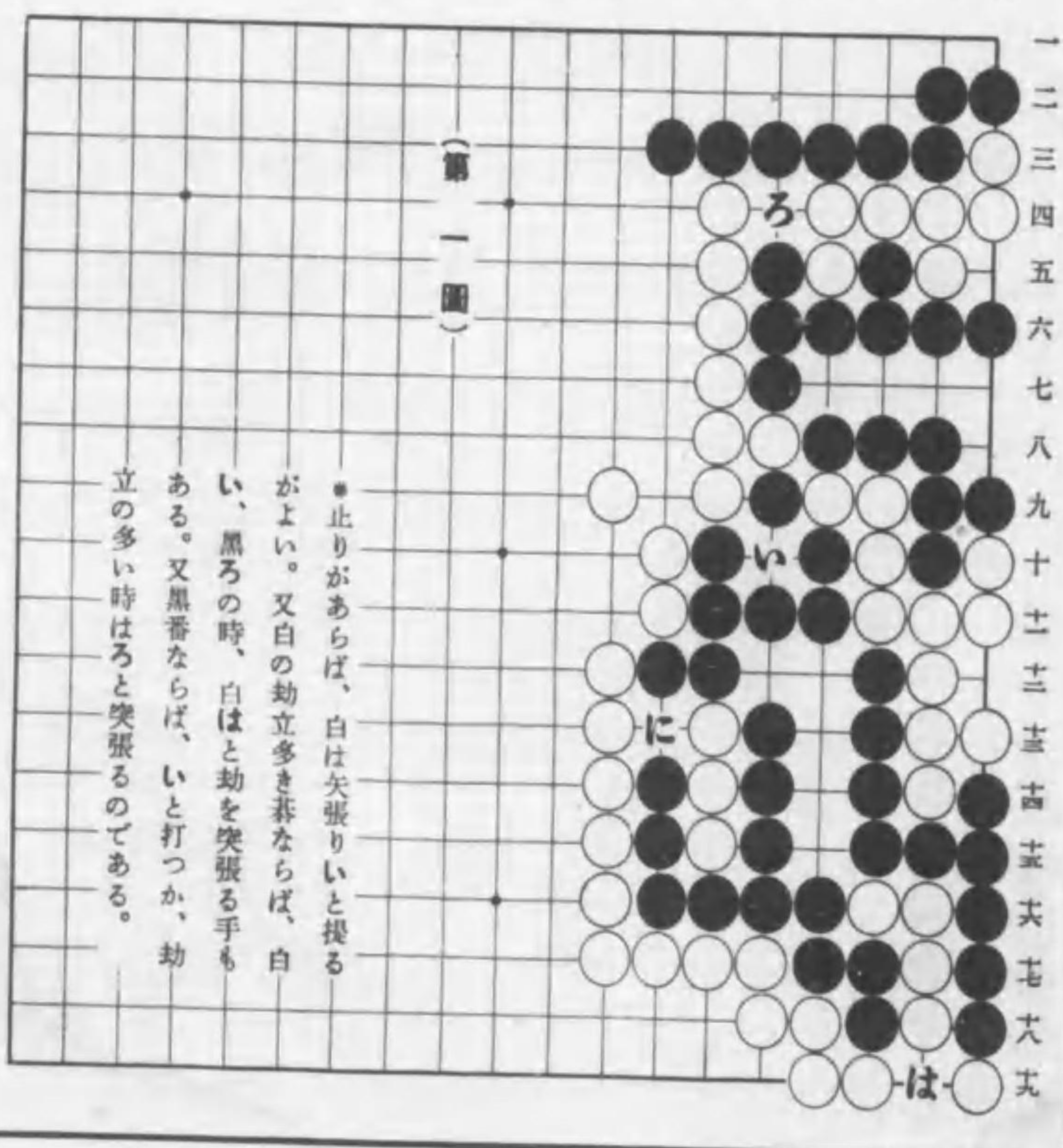
(第一圖) 白いと提り劫を粘ぐは二手で二十五目得である。

又ろに粘ぐは十五目の手、はに粘ぐは十目の手である。

故にどちらを打つても同じ様に思はれるが、實は違ふのである。それは黒の側から言ふ時、いは一手ですみ、ろ、はは二手を要するからである。

たとへばいがろとはとを加へたものより少々小さく共、その差より大なるにの手。

ツソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



● 止りがあらば、白は矢張りいと提るがよい。又白の劫立多き碁ならば、白い、黒ろの時、白はと劫を突張る手もある。又黒番ならば、いと打つか、劫立の多い時はろと突張るのである。

(第二圖) いは二十一目の劫。

にの手止りがろとはとを加へた差より小さいから、白黒双方劫立同数の碁ならば、白はろと粘ぐがよい。

黒いならば白はにて得、黒はならば白の劫も勝ち得る。

又、白の方劫立多き時ならば、白黒ろ白はと突張る事第一圖に同じ。

次に小さい手から着手すべき例を挙げる。

(第三圖) 黒いと提り、粘ぐのは二手にて十九目得。

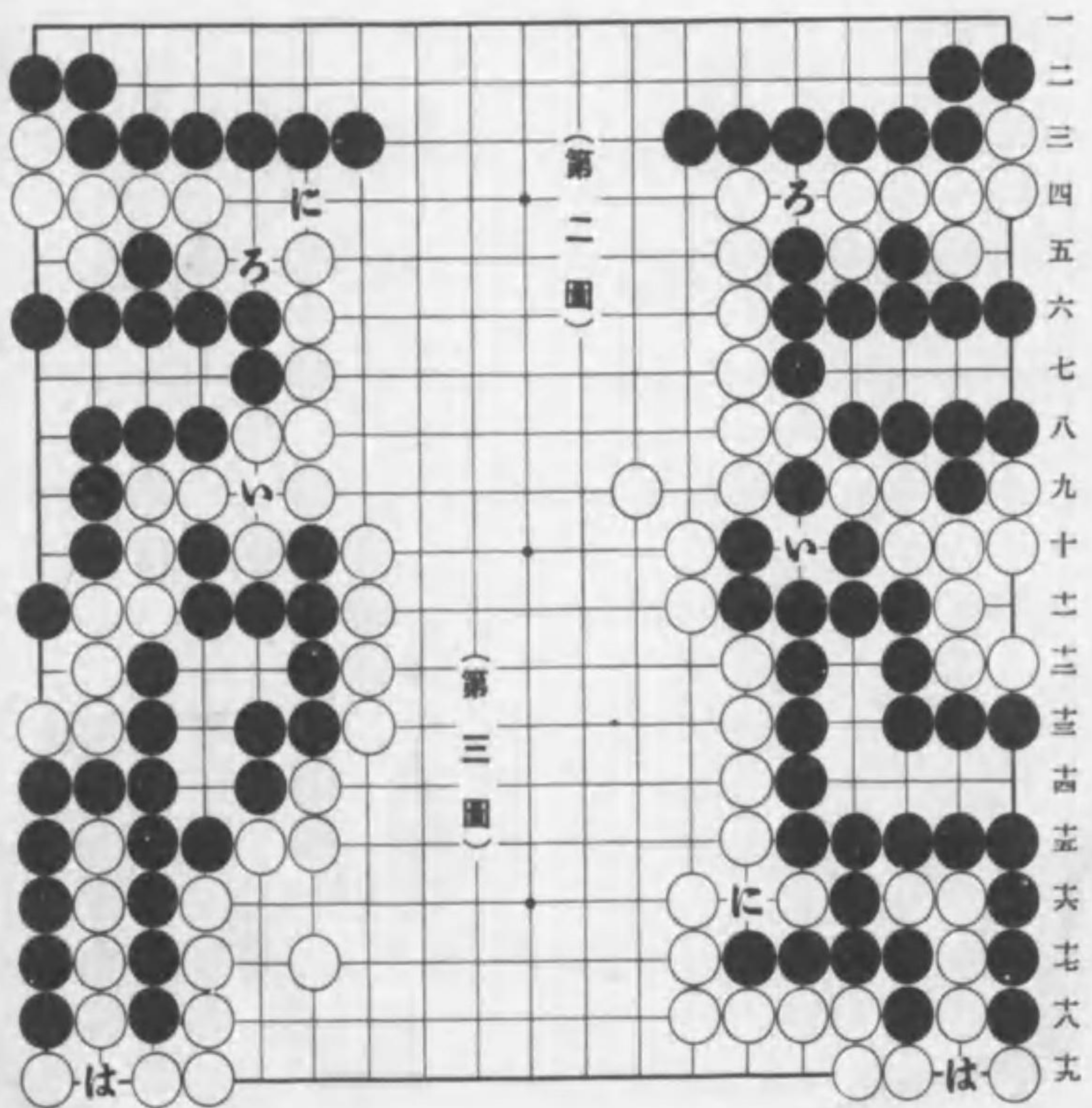
ろは十五目得。

はは十目得である。

他に双方劫立及び打場所なきものと假定して、黒はと十目の方を打ち、白ろならば黒いの劫に勝つべく、白いに粘がば黒ろと截るが得である。

然るに黒若しろと十五目の方を打たば、次いで白は黒いの時、白にの劫立が残るため黒損となる。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



(第二圖)

(第三圖)

(第四圖) 黒いと提り、粘ぐのは二十一目得。

ろ及びはは第三圖に同じ。

第三圖と同じ条件の下に、黒は矢張りはの十目より打つが反つて得である。

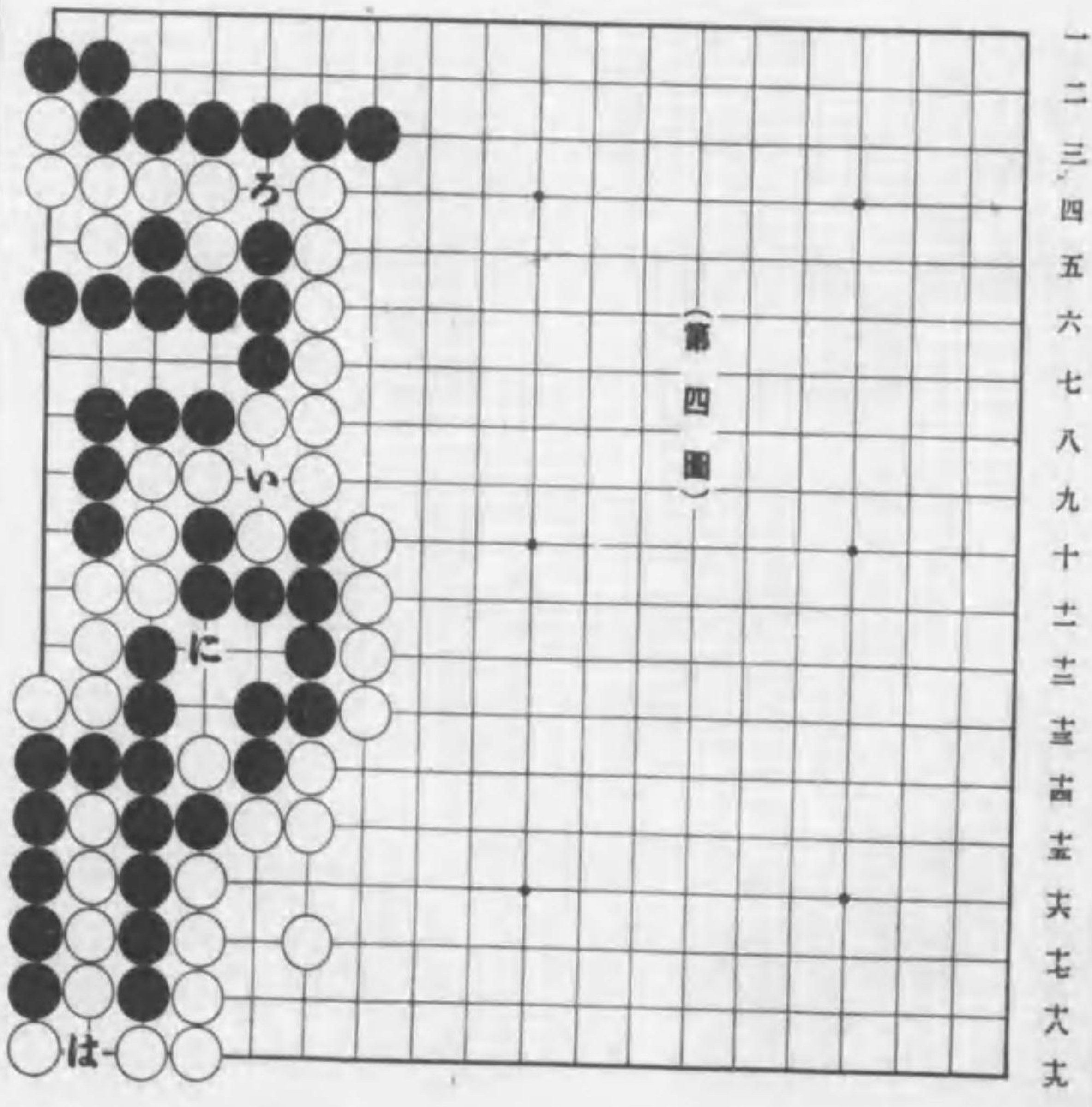
黒ろの十五目を違ふは、前圖と異り白より劫材に利用さるゝ懼れはないが、白はの粘に依りに一の劫が生じ、いの劫が矢張り勝てなくなる。

十五目の手より十目の手を打つ方が得と云ふのは、一寸變に聞えるが、いの劫に關する影響を加へて見れば、不思議はないのである。

故に白としても、いやろに打たずはより着手して行く場合も往々あるといふ事を、心得て置かねばならぬ。

要するに一局部の利害計算に囚れることなく、全局的觀察、比較計算の下に慎重に石を下すべきである。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



(第四圖)

(第五圖) 白一と頂けたのは劫によつて局勢を轉換せんとするのである。

黒十は中央を堅めつゝ劫材を作る策戦。

白十一は騎虎の勢であるが一應二十二に出ておく方が中央に味が残つて良かった。

白十三にて直に四十一に下りたいが、黒上邊の劫材を利用していに截つて来る。

此着、左下隅と左上隅の劫代りになつては局勢がキマリ付くから白は面白くない。

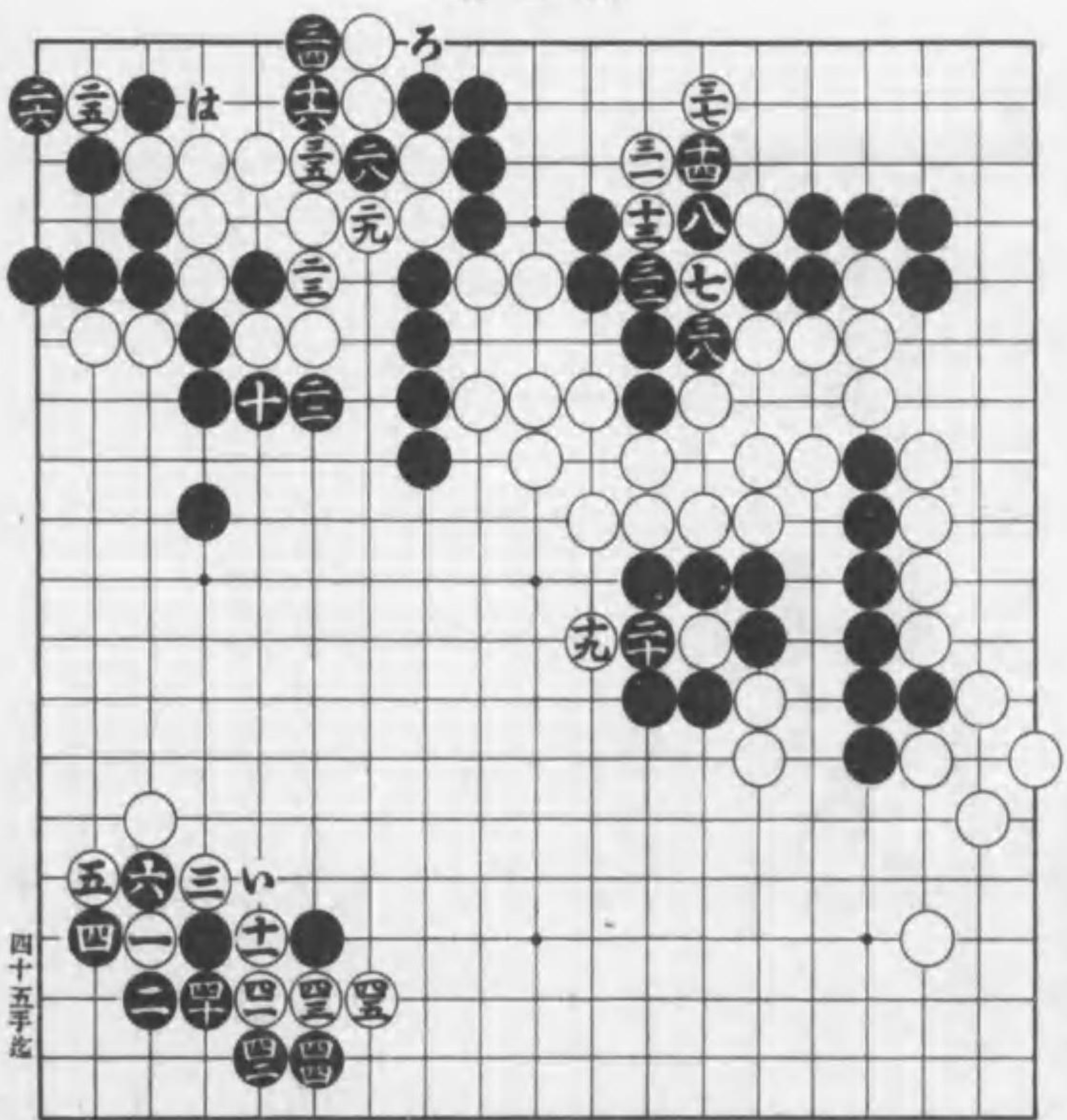
白三十一、三十七、損劫だが止むを得ぬ。黒三十四をろより立てなかつたのは、駄目詰りを避けたのである。

黒四十をろに立て白粘黒劫提ならば、其時こそ白四十一に下るかも知れぬ。それは次に黒はと立てるが大分損劫であるから。

かくて白は下邊を壓迫し、黒は上邊を堅めたといふ振替りとなつた——尙次に。

⑧劫提 ⑨同 ⑩同 ⑪同 ⑫同 ⑬同 ⑭同 ⑮同 ⑯同 ⑰同 ⑱同 ⑲同 ⑳同 ㉑同 ㉒同 ㉓同 ㉔同 ㉕同 ㉖同 ㉗同 ㉘同 ㉙同 ㉚同 ㉛同 ㉜同 ㉝同 ㉞同 ㉟同 ㊱同 ㊲同 ㊳同 ㊴同 ㊵同 ㊶同 ㊷同 ㊸同 ㊹同 ㊺同

(圖五第)



四十五手迄

(第六圖) 白一と截つた時、黒は先づいと提るが普通であるが、この場合、白二

黒粘白三黒ろ白はと截られる懼れがある。白九は一才面白筋で、これがため中央の黒に獨んで来た。

白二十一は四十一が詰つた時黒にの手に備へたのである。

黒二十二は二十九に飛び八子の黒を捨てるが安全である。

白二十三を二十六に行びると、黒二十三と押されて提れないやうであるから、踏の如く劫にしたのである。

白三十五大悪、このまゝ劫を争へば負けでも損害が少ないから、多少の劫代りを得れば有望だつたのである。

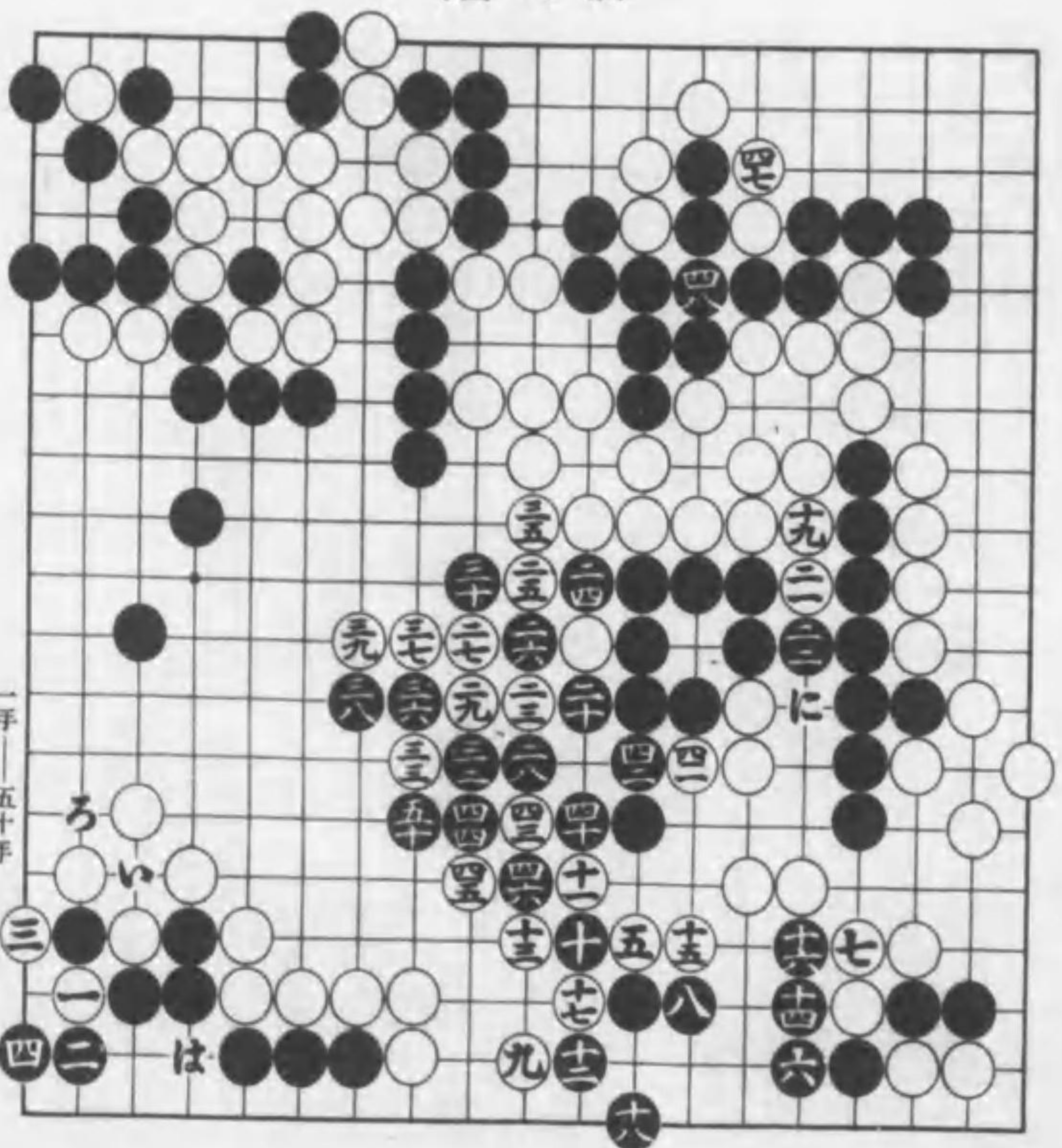
次頁に續く。

⑳劫提 ㉑同 ㉒同 ㉓同 ㉔同 ㉕同 ㉖同 ㉗同 ㉘同 ㉙同 ㉚同 ㉛同 ㉜同 ㉝同 ㉞同 ㉟同 ㊱同 ㊲同 ㊳同 ㊴同 ㊵同 ㊶同 ㊷同 ㊸同 ㊹同 ㊺同

五十手迄。

(注意) 第五圖第六圖間に十数手あるも本稿に關係なきに付省略しました。

(圖六第)



一手—五十手

110五

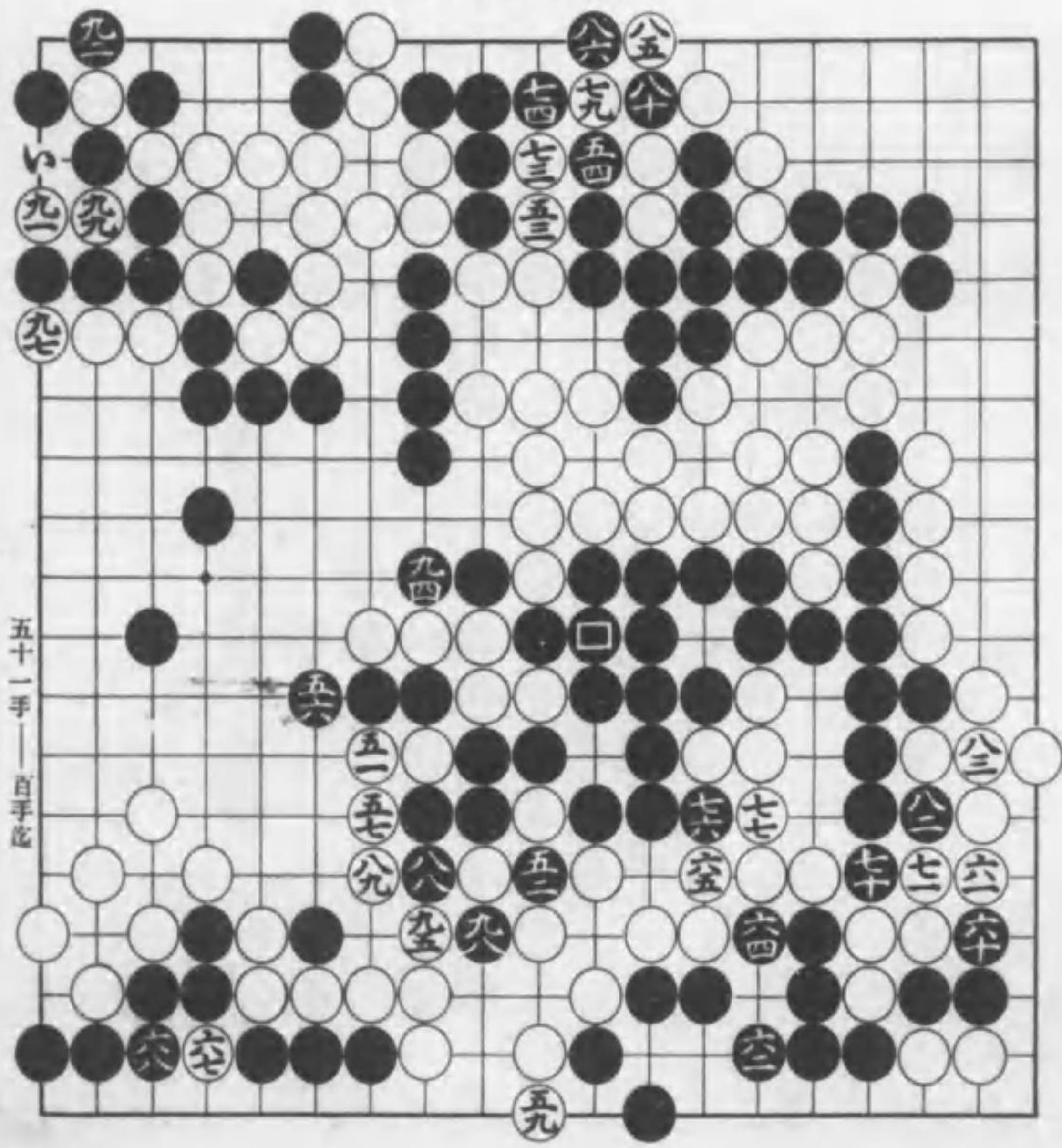
(第七圖) 白五十三の劫立は暫らく見合すがよい。劫数の工合により少々損でも五十四の方から立てる事になるかも知れぬからである。

白五十九はこの際六十より立つべき處。黒六十二は六十に打たねばならぬ。然るに白六十三の劫提は輕卒も甚しく、六十を黒から利かされ、こゝに數劫の損をなしたのは實に勝敗の決であつた。

以下、黒十分得をしてから劫を打抜いたのは宜しい。早く劫代りすると黒に勝目はない。白九十一を九十九に立ていに打抜く事が出来れば、未だ幾分か争ふ事が出来るのであるが、譜の白九十九迄の結果、隅が劫残りでは萬事休す。本局、白は劫代りが不十分となり即ち劫残りにて負となつた。

- ①劫提 ②同 ③同 ④同
- ⑤同 ⑥同 ⑦同 ⑧同
- ⑨同 ⑩同 ⑪同 ⑫同
- ⑬同 ⑭同 ⑮同 ⑯同
- ⑰同 ⑱同 ⑲同 ⑳同
- ㉑同 ㉒同 ㉓同 ㉔同
- ㉕同 ㉖同 ㉗同 ㉘同
- ㉙同 ㉚同 ㉛同 ㉜同
- ㉝同 ㉞同 ㉟同 ㊱同
- ㊲同 ㊳同 ㊴同 ㊵同
- ㊶同 ㊷同 ㊸同 ㊹同
- ㊺同 ㊻同 ㊼同 ㊽同
- ㊾同 ㊿同 百手迄。

(圖七第)



劫残り

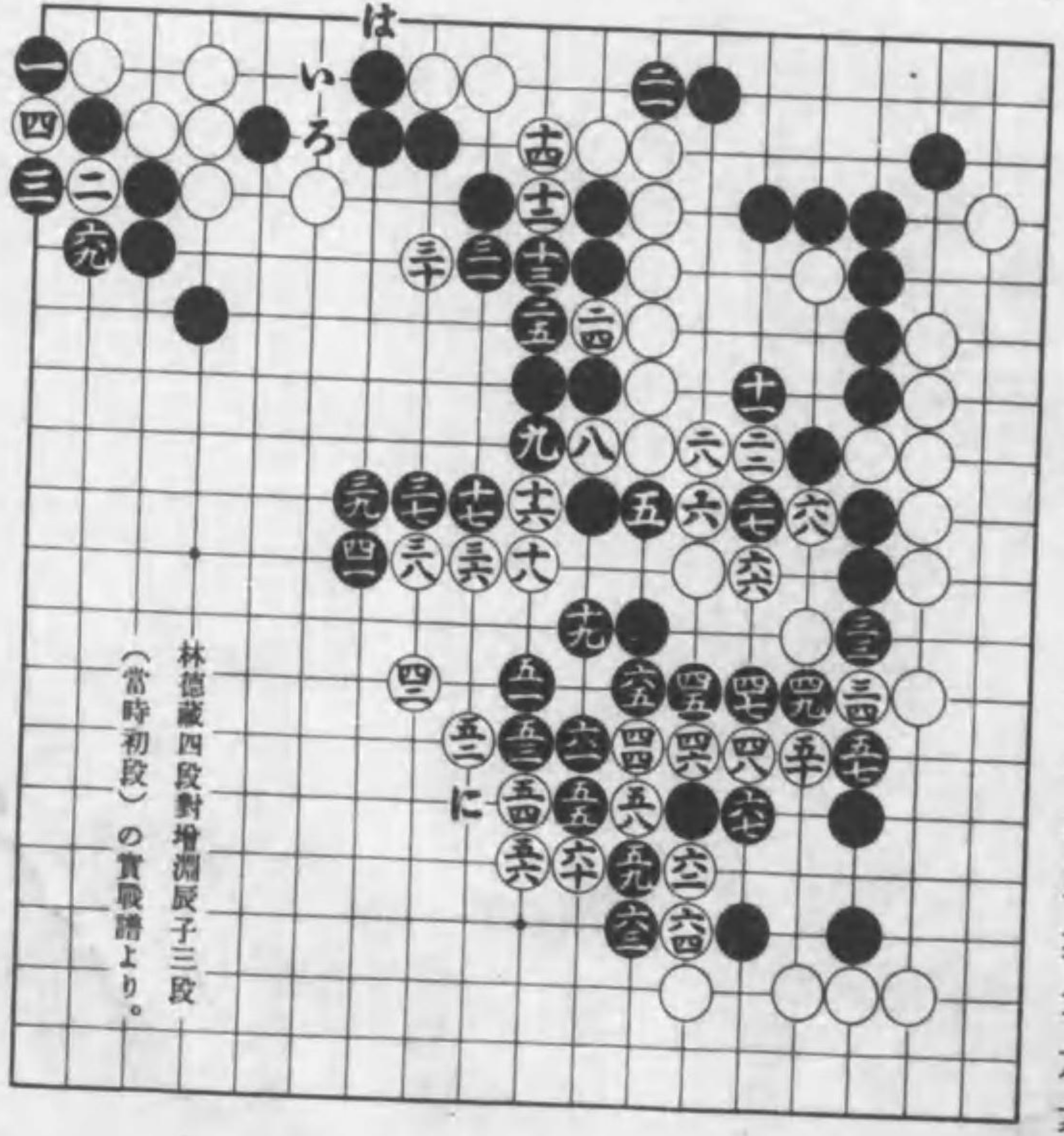
「劫残り」とは或る劫を何れか一方が打抜いた跡に尙劫味の残る事を言ふ。

故に、或る劫の代償として他に又劫の生ずる「劫移し」とは性質の異なるものである。前圖左上隅に劫残りの好例があつたが、尙一例を挙げて見やう。

下圖左上隅、黒六十九と劫を打抜いた時、白いと頂け黒ろならば白は、黒はならば白ろの劫残りである。この碁は白四十四以下損をしてしまったので白敗となつたが、白四十の劫提にて四十一に押すか、白四十四にて徐にに備へ、劫は打抜かしても他日の劫残りを利用する意味で打てば相當争へた碁である。

- ①劫提 ②同 ③同 ④同
- ⑤同 ⑥同 ⑦同 ⑧同
- ⑨同 ⑩同 ⑪同 ⑫同
- ⑬同 ⑭同 ⑮同 ⑯同
- ⑰同 ⑱同 ⑲同 ⑳同
- ㉑同 ㉒同 ㉓同 ㉔同
- ㉕同 ㉖同 ㉗同 ㉘同
- ㉙同 ㉚同 ㉛同 ㉜同
- ㉝同 ㉞同 ㉟同 ㊱同
- ㊲同 ㊳同 ㊴同 ㊵同
- ㊶同 ㊷同 ㊸同 ㊹同
- ㊺同 ㊻同 ㊼同 ㊽同
- ㊾同 ㊿同

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ

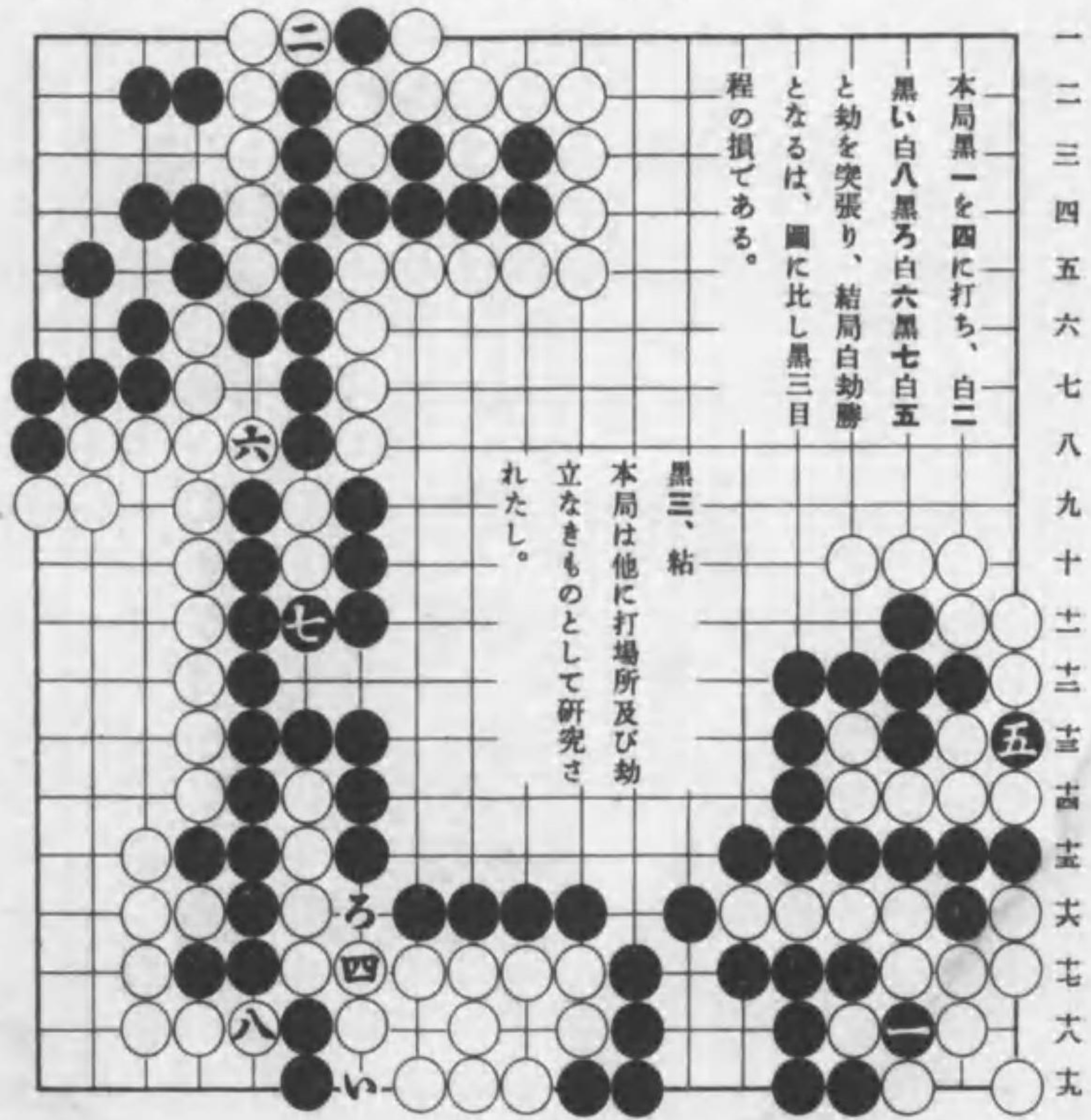


林徳蔵四段對増淵辰子三段 (當時初段) の實戦譜より。

劫と倭分

劫が出来ると倭分の工合も難かしい。
 黒一と提り粘くは二手で二十八目の得。
 二の處は通常一手十四目程の手であるが
 黒より打つと白六の劫立が生じ一の劫に影
 響する損を差引かねばならぬし、白より打
 つはその影響を加へて計算すべきである。
 黒一にて四に打込み、次にいと居るは、
 白四、八となるに比し、三十七目程の得、
 又白四、黒八となるに比し二十九目程得、
 平均三十三目程得である。
 若し黒四の時白八と受くるものとせば、
 白四、黒八となるに比し五目強得となる。
 然るに黒一と小さい方から打つたのは、
 他日白六の劫立に早くも備へた譯である。
 一の劫の價に五の十二目を加へたものが
 黒四、いと打つ利益よりも大きいといふ事
 は、本局の打方に大關係がある。若し小さ
 ければ黒一は四より打つ理である。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



珍らしい劫

劫の問題

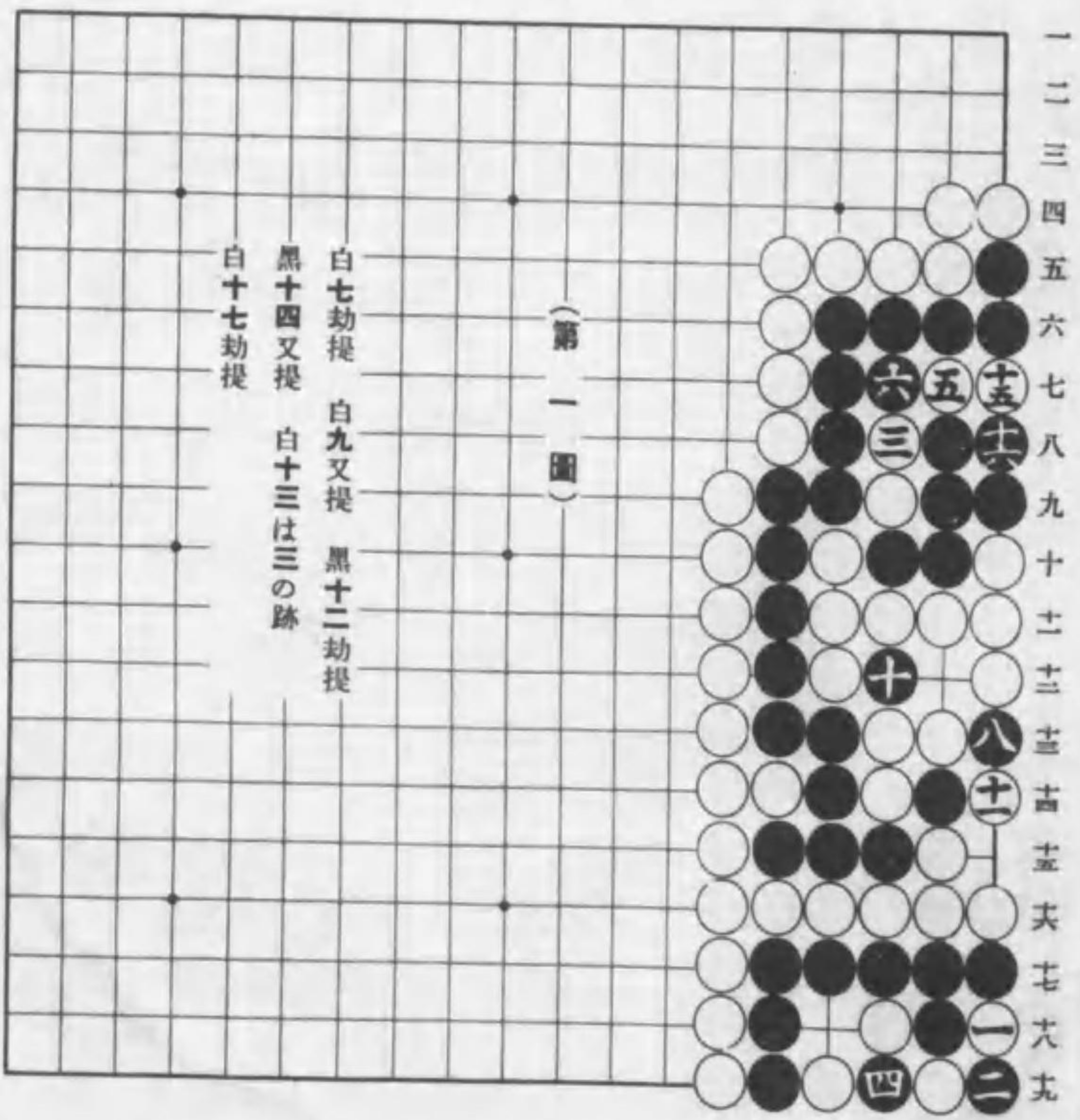
最後に珍らしい劫を紹介して劫の研究を
 終らうと思ふ。

(第一圖) 右下隅の黒は、白からは劫
 にも持にも出来るが、黒からは持には出来
 ず、二に打込んで劫にする等は容易に行は
 れないから、黒の分の悪い處である。

然し白にも他に劫材がないから黒は安心
 してみると、意外にも白は一と打込み、三
 と劫材を製造した。

黒は八を以て是に酬ひたが白には尙十三
 の打込みが残つてゐて、結局白十七と劫を
 提られる手順となり、黒は外に劫材のない
 莽であつたので、遂にやられてしまつた。
 過つて黒は三の處へ一手、手入れして置
 く必要があつたのである。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



(第二圖) 黒二はいに粘りて第三圖の如く打つが普通である。
 黒四も向いに粘り白五黒六とする方が普通である。

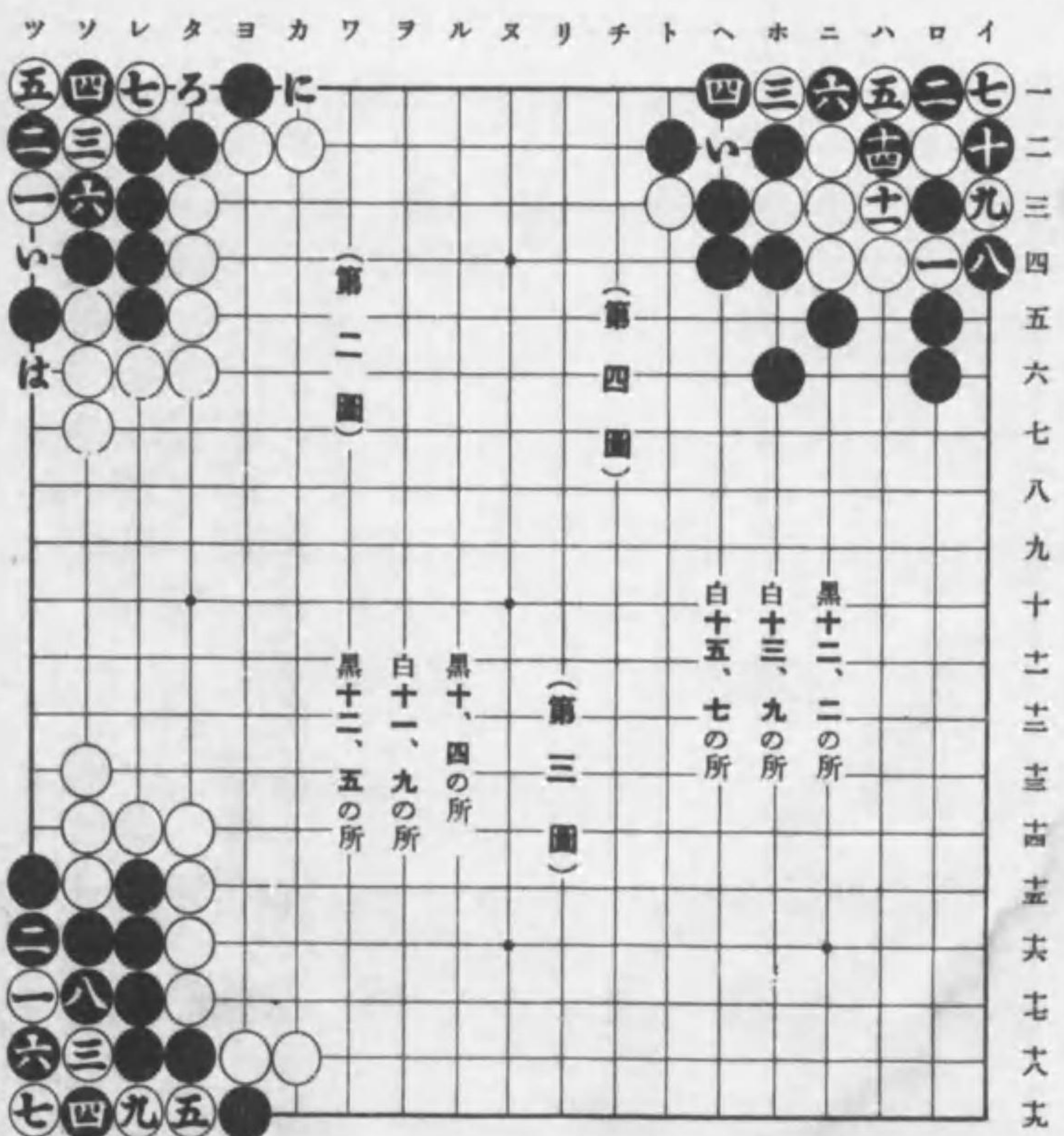
其時白ろに打込まば、黒も四と打込んで兩劫活となり、又白はならば白一手の寄劫となる。

譜の七までの結果は、白よりは又はにと抑ふるも、黒よりい又はろと抑ふるも、同じく一手劫とは面白い。

(第四圖) 「一合掛」類似形中の新型である。

黒よりの劫材が多い場合と假定する。
 白五は一應はいに捉るべきものである。
 黒十二以下、一寸變つた兩劫活である、
 詰めて下さい。

其他、「三劫の部」「四劫の部」等に掲げた諸圖は、何れも常には見られぬ珍しい劫と言ふ事が出来やう。



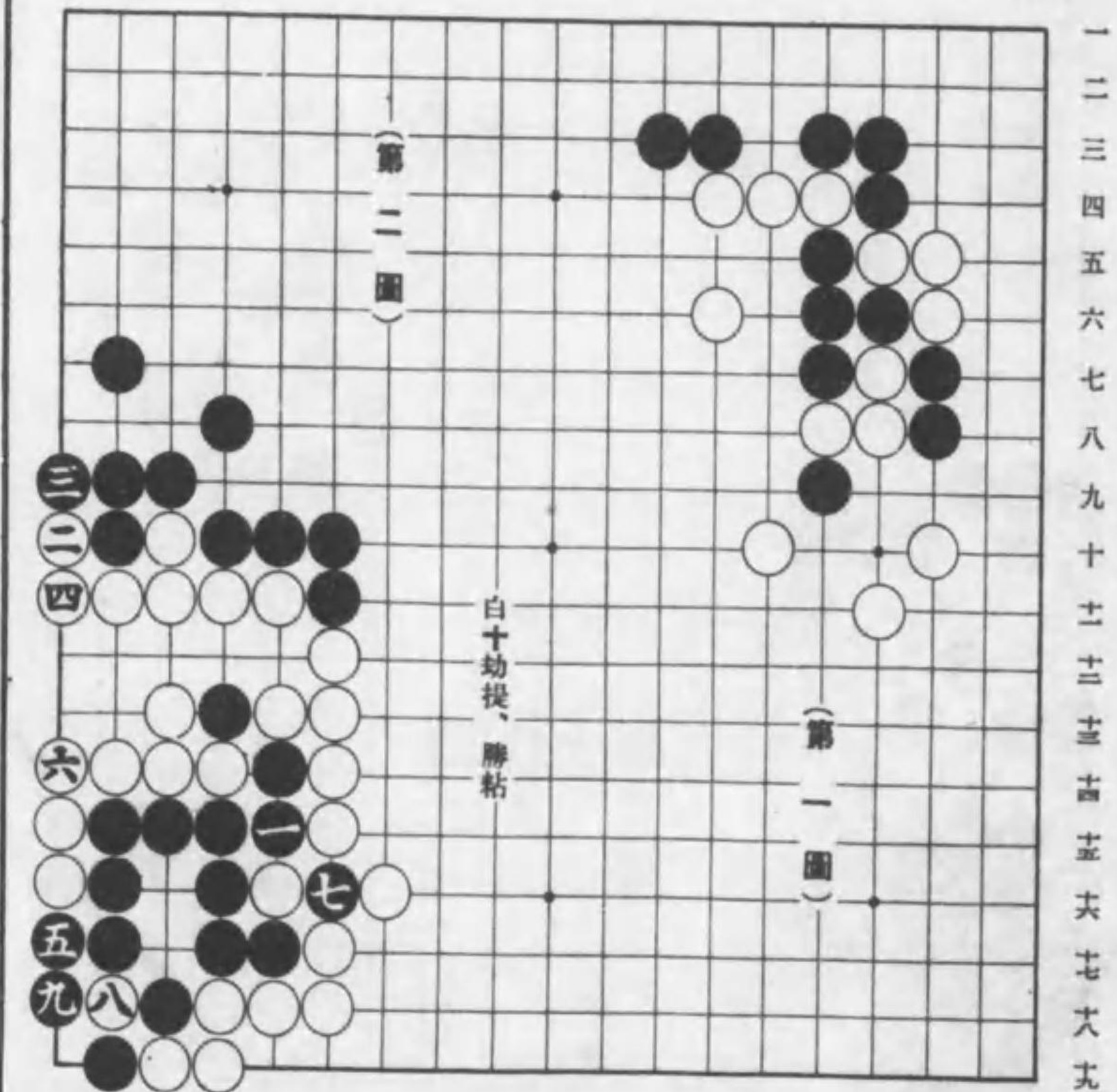
問題一

(第一圖) 劫詰物である。
 黒先、劫の變化を詳述する事。

(第二圖) 他に打場所も劫立もなきものと假定し、圖の如く白一目の勝とする。
 ——黒に回天の策なきや?

解答は次頁に在り。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



正解——

(第一圖) 黒先劫勝

黒一がよい手である。これを四に絆ね、白七黒八白十二黒十五白十黒いとすも劫であるが、この劫は勝てない。

白四を五に飛ぶ手筋もある。

さすれば黒十二白四黒い白ろ黒六白八黒はにて矢張り黒劫勝である。

白六をいに抑へると、黒六白十三黒十五白十黒七白十二黒に白十四黒九白十六にて黒劫を提り勝。

要するに本題の味は黒三及び黒五の妙手にある。

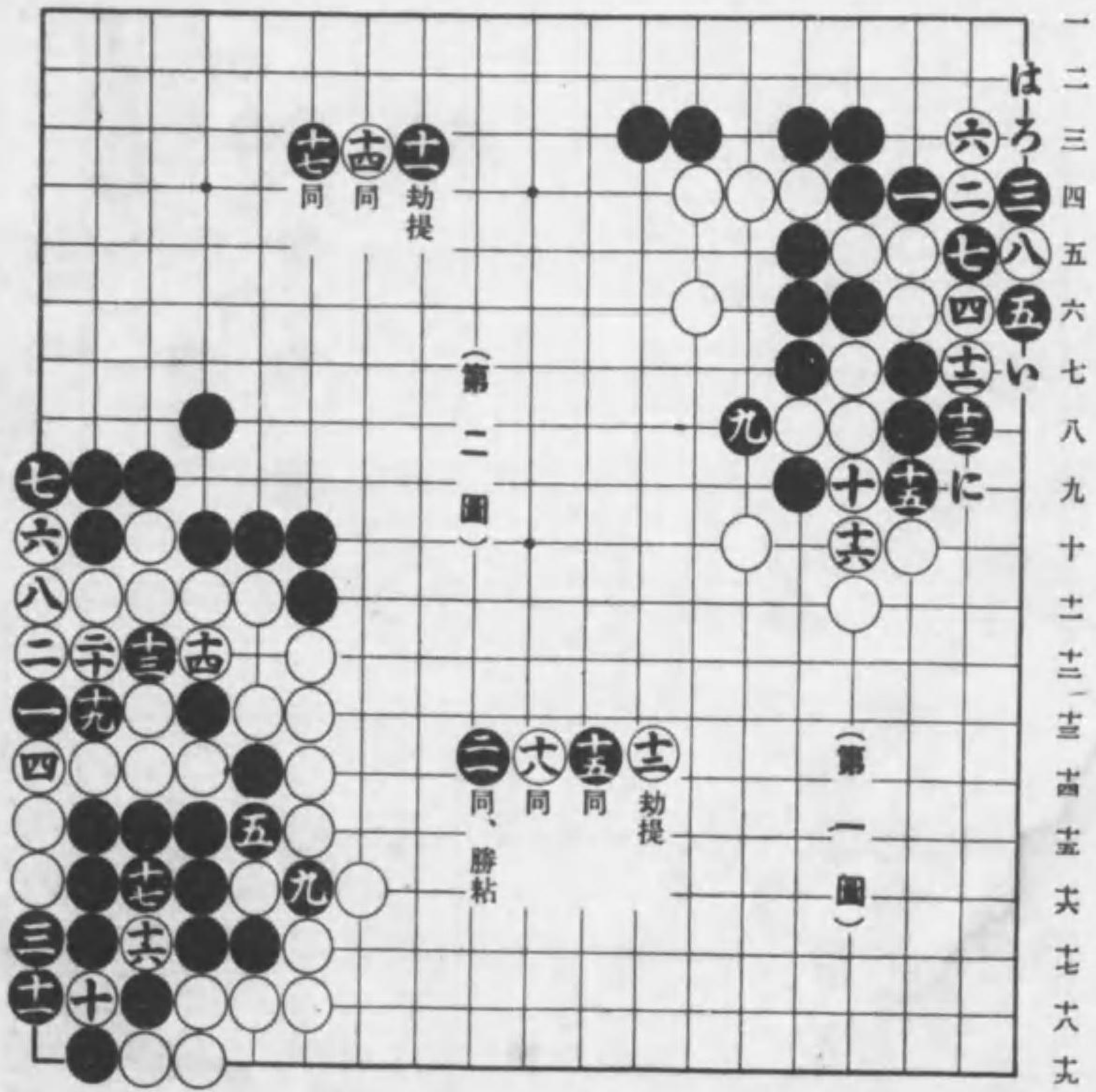
(第二圖) 黒先劫勝

黒五と粘ぐ前に一と置いておくが手筋でこれがため後に十三、十九の二劫を生じ、結局半劫に勝ち得て市になる譯である。

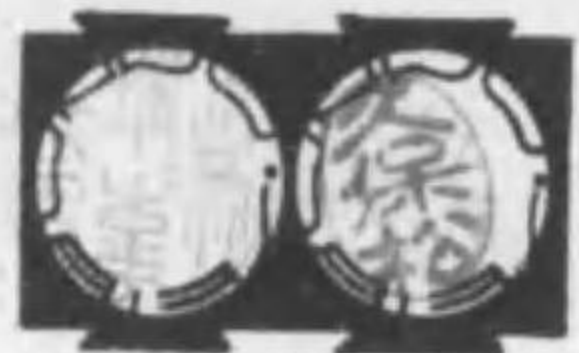
白二を四に粘がば黒八に盤り、黒に分のよい市となる。

「劫の研究」了。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



著者 有所



侵分と劫の研究

昭和十年五月一日印刷
昭和十年五月十日發行

日本棋院藏版

著者 久保松勝喜代

發行人 小川菊松

印刷人 和田助一

印刷所 單式印刷株式會社

發賣所

東京市神田區錦町一丁目十九番地
電話神田二二六・二二七・二二八・二二九
板橋口座東京四五三・四〇番

誠文堂

301
58

終

